資料２

淡路島観光会議(10/31)における意見への対応

意見①

コロナ前時点で数値目標に届いていないばかりか、交流人口が 2016 年には 1,278 万人、2019 年には 1,260 万人、目標が 1,500 万人なので、厳しく分析していく必要がある。

宿泊者数も 2016 年には 130 万人、2019 年には 124 万人と減っている。計画は 200 万人。

特にインバウンドにおいては、日本全体で 2016 年の 2,404 万人から 2019 年度で 3,000 万人を超えて、約 33%増となっているが、淡路島はむしろ半減している。

【対応】（資料４　Ｐ５～７）

戦略素案・本編（資料４）「第１章　現行戦略の進捗状況　２　現行戦略の数値目標に対する結果」の以下の項目について、観光客動態調査等以外の指標も活用しながら分析を行い、その結果を記載する。

２　現行戦略の数値目標に対する結果

（１）交流人口（観光入込客数）

（２）宿泊客数

（３）国際ツーリズム人口（外国人宿泊客数）

（４）観光消費額

（５）住民満足度

意見②

淡路島では、京阪神の富裕層を中心に観光客を取り込んでいたので、淡路島はインバウンドに力を入れてこなかった。しかし、関西万博をきっかけにインバウンドは重要な観光資源と認識すべきではないか。

【対応】

インバウンドも念頭におきつつ、国内旅行の約半分のシェアを占める首都圏等（遠隔地）からの誘客を目標に取組を進める。

首都圏等（インバウンドを含む遠隔地）からの誘客を促進するためには、まず今ある観光資源を遠方からの旅行者に強く訴求する観光コンテンツとして磨き上げ、円滑な移動等にも対処していく必要がある。このため、「他の地域では味わえない淡路島の魅力を引き出し、旅行者の嗜好の変化に適応したコンテンツの開発」、「遠隔地からの旅行者を意識した高付加価値型商品の造成」、「島外からのアクセス改善や、島内外への周遊を促進する受け入れ環境整備」を推進する。

これらの取組を着実に実行することが、ｲﾝﾊﾞｳﾝﾄﾞの誘客にも必要不可欠な取組である。

意見③

・　戦略素案は観光のベーシックな施策の記述に終始している。大きな目標がはっきりしていない。「選ばれる観光地」では具体的な目標とは言えない。例えば「我が国屈指の滞在型リゾート地を目指す」等であれば、目標が具体的となり、その実現に向けて各施策が関連づけられてくる。みんなが分かるように整理することが必要ではないか。

・　例えば、神戸空港国際化（2030 年）に対して、淡路島はどう取り組むか？三ノ宮のバスターミナル改装に対して、どう淡路島観光と結びつけるか？島の魅力と南北や海辺の連携を前面に出して、新たな観光ステージに向かうという方向感・躍動感をもってメリハリの効いた計画を立ててはどうか。

・　確かに細目としては良いが、将来の淡路の観光をどうするかの目玉を考える必要があると思う。

【対応】

・　淡路島のめざすところは、「いのち輝く島～個性が輝き続ける未来島へ～」である。淡路島に関わるひと、もの、文化、食等の多彩な個性を「いのち」として、これらが輝く島であることを願ったものである。

　基本理念の「知られる観光地から選ばれる観光地への転換」は、京阪神エリアから交通至便で知られた観光地から、淡路島の多彩な魅力にふれたい、時間とお金をかけてでも淡路島へ行きたいと思わせる観光地へ転換する必要があると考えたことによる。

・　例示の「我が国屈指の滞在型リゾート地」とあるが、次期観光戦略としては、淡路島の歴史・文化・地場産業など淡路島の本来持っている魅力も磨き上げるものを考えている。

・　次期観光戦略期間中の重要なトピックスである大阪・関西万博に合わせ、フィールドパビリオンの展開、全島一体となった「島博」に基づく取組を検討していく。

意見④

　目の前には万博・神戸空港の国際化、人口の減少・高齢化・DX の進展などに対して具体的なものがない。内容的には長期計画かと感じている。中期計画だと、もう少し具体性が必要。計画の中に検証・検討という表現があるが、これは計画ではない。

【対応】

　具体的な取り組み内容については、現在検討中の戦略・アクションプランのなかで具体化していく。